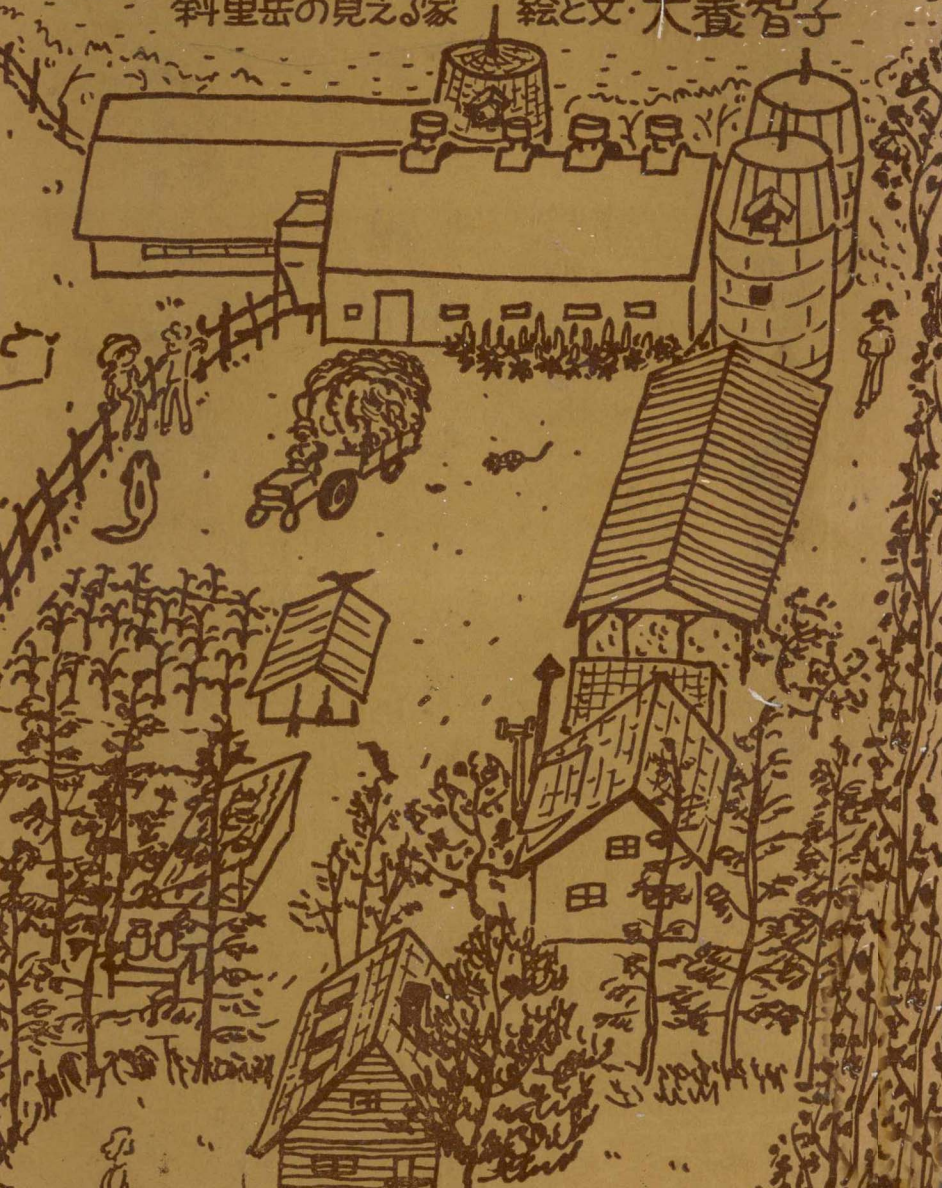


われら緑の大地に生きる。

斜里岳の見える家 絵と文・犬養智子



われら緑の大地に生きる。

斜里岳の見える家

絵と文・犬養智子



じゃこめてい出版

《著者について》

犬養智子（いぬかい・ともこ）

一九三一年東京生まれ。学習院大学卒業。イリノイ大学に学び、帰国後、社会・婦人問題にシャープな筆をふるって、注目を集める。楽しい絵入りのエッセイや創作をも物し、人間と旅と土の香りが大好きな冒険家でもある。著書に『女の人生をイキイキ楽しむ12のおはなし』（じゃこめてい出版）『主婦よ、さようなら』（中央公論社）『家事秘訣集』（光文社）『パーティの本』（光文社）『あなたはどうか生きるか』（毎日新聞社）『女も七人の敵をもつ』（大和書房）など。

われら緑の大地に生きる。

著者・犬養智子

編集者・青木太郎

発行者・槌谷英一郎

発行所・株式会社じゃこめてい出版

東京都千代田区神田神保町二一四六

電話東京（二六四）三七七九

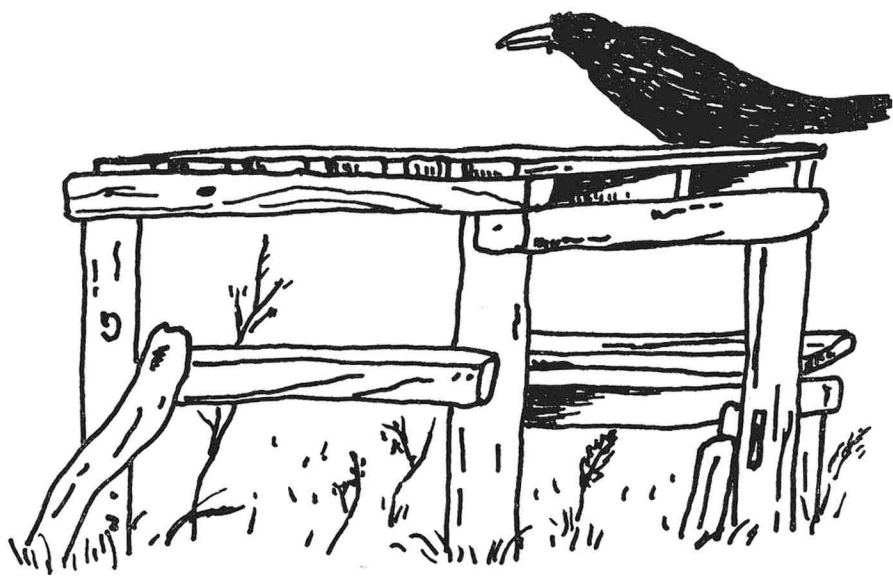
振替・東京一六七一一七九

印刷・三晃印刷株式会社

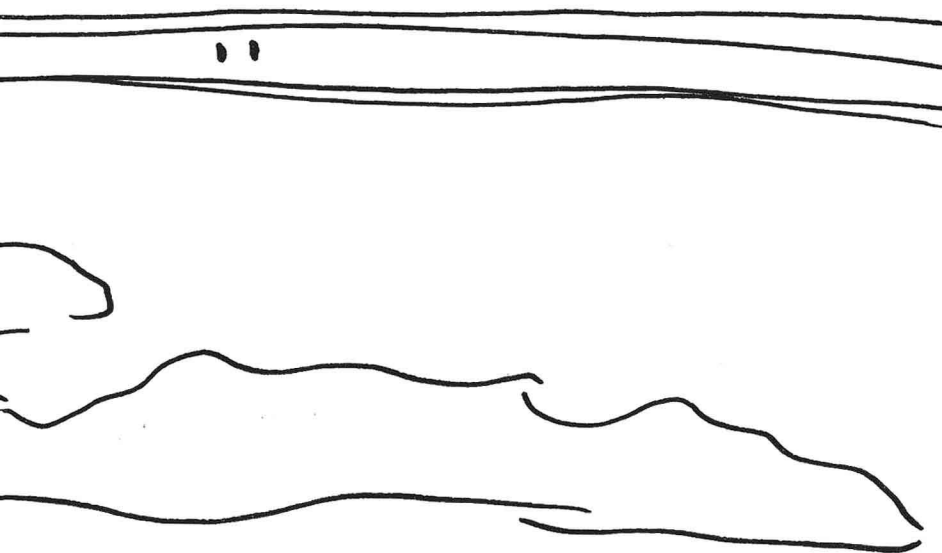
製本・協和製本株式会社

©Tomoko Inukai 著「乱丁本はお取り替えます」

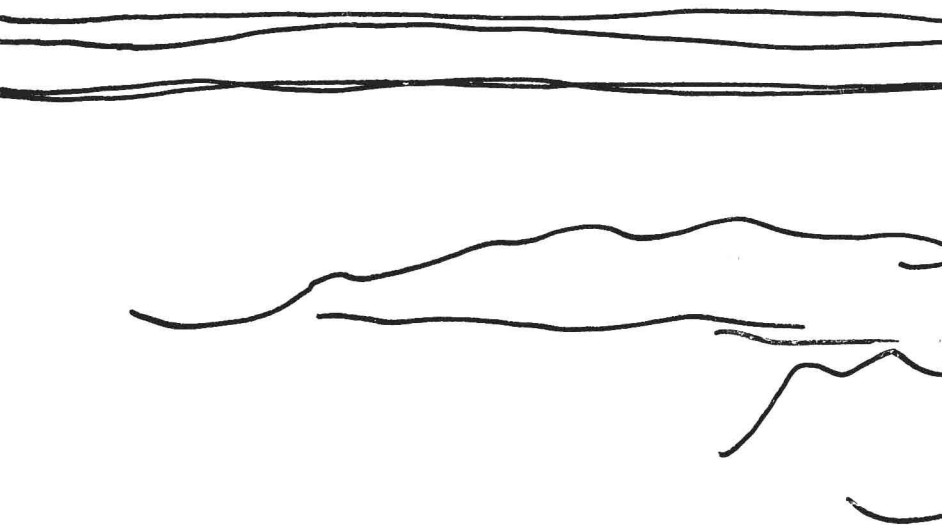
目次



1 丘の上の気になる2軒	7
2 ほんとうに土地を愛する者は	29
3 インフルエンザ牧場を襲う	47
4 流氷のりの春	63
5 流氷原にトツカリを追う	85
6 東京は雨に煙っていた	107

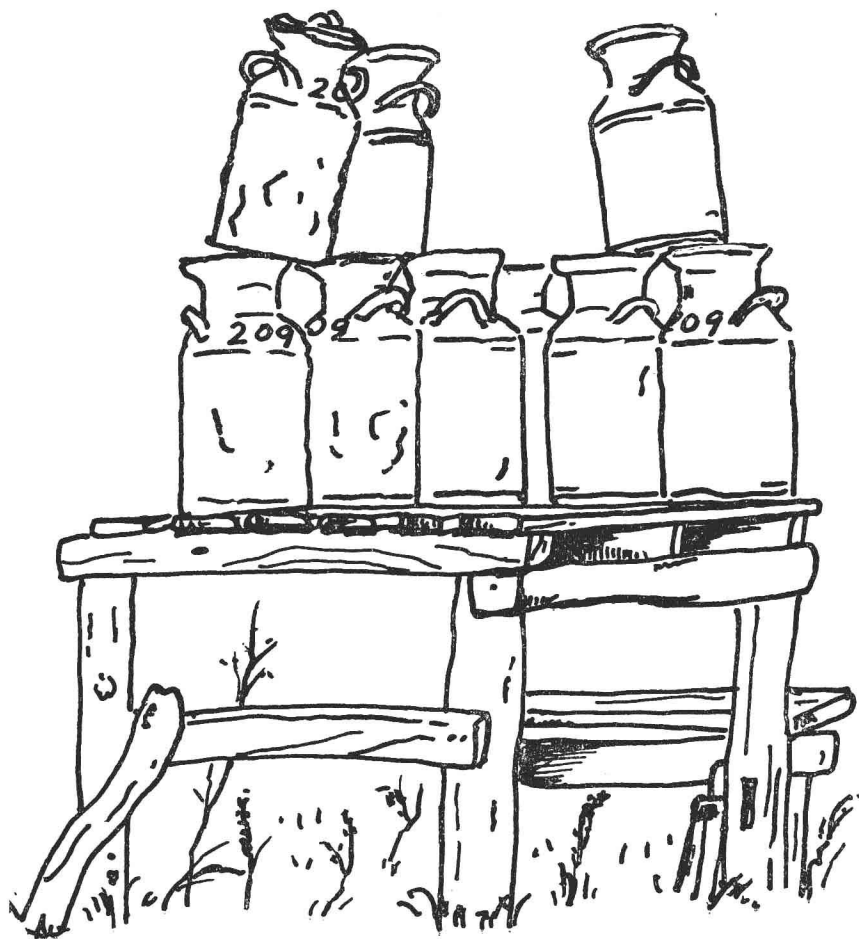


7	密漁の季節がやってきた	125
8	オホーツクの海賊キャンプ	147
9	ワンダーランドの2人と1匹	169
10	ベコの仔が生まれた	189
11	アキアジ漁に2人は	211
12	サロリンに初雪の降る日	231



イラストレーション・装幀 犬養智子
レイアウト・シタリング 中村 稔
仙石克己

コンクリートの町の向うに、みどりの
大地がひろがっています。そこには
まだ、いじりまわされない自然があ
り、人々は傷つけあわずにいきいき
と暮らしています。そんな土地へ行
てみたい人は、この本のページをく
ださい。



おはなしは、この人たちを中心にくりひろげられます。



霧生朝美
(獣医)



ミミ
10才
(朝美のおすめ)



モアオーバー
(ミミのペット)



直哉
(ミミのおじさん)

針ノ巣丈二
(牧場主)



森二郎
(牧童)

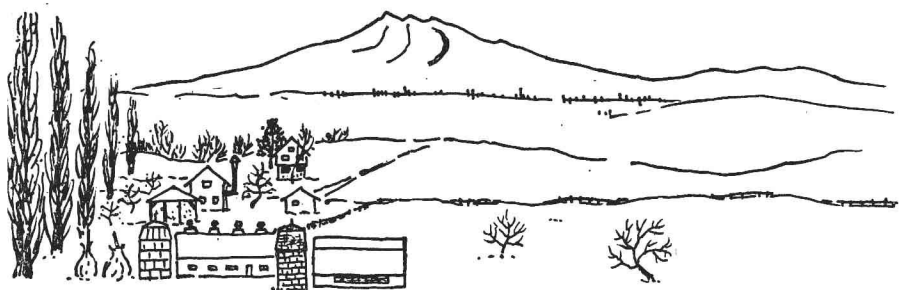


げんや
原野
(11才・丈二のおすこ)



チェ・ゲバラ
(原野のペット)





丘の上の 気になる2軒

どこの町にも、どんななかにも、気になる家庭、ひとの注意をひく人物、というものがある。

斜里岳しゃりだてを原野のむこうに眺めるサロンの町では、それは霧生と針の巣という二つの家庭だった。

二軒は、この美しい山をま正面に見るならかな起伏の上に隣りあって建っているうえ、家の主は、朝美と丈二という独身の女と男だった。これでは、サロンの住人たちが、とくに知りたがり屋でなくとも、折りにふれ気にするのも無理はない。

いま、その片方の家の横長の窓で、ひとりの若い女が、窓いっぱいにはたがる斜里岳をじっと見ていた。山は朝の青い空に白く尖った頂点を浮きたたせ、長くひいた裾にきれぎれの小さな雲をひきつれて、すっきりと立っていた。

見あきない山だわ、孤高なところがいい。でも、あの山の肩の空には、穴がぼっかりあいている。朝美は心の目で、きーんと青い空に、暗い穴がトンネルのようにあいているのを、はっきりと見た。

「私の青春はすべてあの穴の中へ投げこんだわ。動物相手の毎日の生活は張りがあるけど、私にとって、この穴が埋まることは永久にない。私も年をとったのね」

朝美はつごうよく自分の若さを忘れて、溜息をついた。その実、からだがどんなに疲れても、人生に倦むうような女ではなかった。

元旦の家の中はしんとしていた。まだ娘のミミも、弟の直哉も起きていないにちがいない。白い雪原に、葉の落ちた防風林が褐色のごばん模様を描く遠影の中から、まっすぐな道を、バイクが一台近

づいてきた。形は次第に大きくなって、朝美の家の下でエンジンが止まると、郵便配達の木下さんが降りた。一階が物置きで、二階以上が住まいになっている家の、外階段を急ぎ足でのぼる物音がきこえた。朝美は扉をあけた。

「うう、凍れる。おめでとう。ほれ、年賀状だ」ひよい、と一束を渡された。「獣医さん。今年はだんなさんもったらどうかね」郵便配達は氣がるにいった。

「そうねえ。でもこのままも氣らくよ」

朝美があっさり片づけたのは、冬の長いサロルの町では、人々の情報は、もっぱら、家々を回る二組みの職業の人、一つは郵便配達、一つは自分たち獣医の手によってこぼれることを知っていたからだ。片手にあまる年を過ごした愛すべき土地の人々ではあっても、朝美は、そこまで他人にはいりこまれるのはいやだった。

木下さんは、もうひとつ奥の針の巣牧場へ足を向けた。つもった雪がコーンスターチみたいに、長靴にキュッキュッと鳴った。あのひともふしぎな運命をもった女だな、生まれていらい、この町から動いたことのない郵便配達夫は思った。女で大動物の獣医になること自体も、少し変わっているけれど、朝美の経歴が、若い人生にしては起伏に富みすぎているように思えた。カナダの獣医学校で勉強しているとき出あったカメラマンの博と結婚し、娘を産み、東京へ帰ったのに、あんな喧噪の土地に住めない、家族でこの土地に移り住んだ。その博が漁の撮影に出て船と共にシケの海で遭難した四

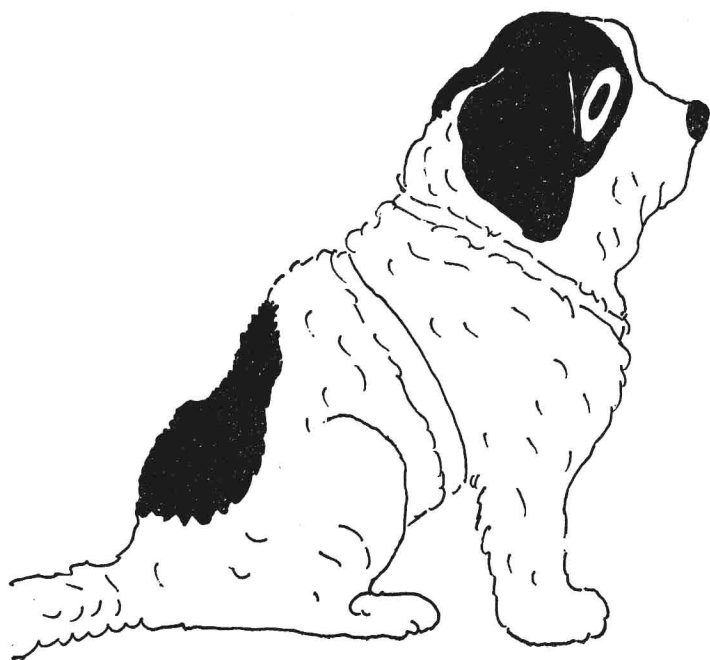
年前、東京に引きあげるかと思ったのに、残された一家はそのままここに居ついたのだ。若い女に、なんでこんな土地が面白いのだろう。しかも弟まで、大学とやらを出退して、ここに住んでキタギツネや北国の動物をカメラでとりまくっている。

だが、あの人のためにも亭主を見つけてやらなくちゃ、そのためには針の巢牧場の丈二がいいのだ、こっちは少し年がいつてるが、十年前に女房を病気でなくしているからな。あの若さで女をひとりにしておくのはよくない、木下さんは、仲間とかわした、今年こそ二人を結婚させるのだという賭けを思い返して、少し猥雑な微笑を顔に浮かべ、針の巢の戸口の前の豆リンゴの木の下をくぐった。

クリスマスのもみの木がまだ飾られている、山小屋風の部屋の中で、朝美は小さな家族とむきあっていた。正月らしくない部屋の中で、それでも食卓だけは、北海道の正月の香りを漂わせていた。弟の直哉がおぞう煮をよそっているのは、これは、北海道では男がつくるもの、になっているからだ。土地の人が黒ダイヤ、とよぶ黒大豆入りのおもちを、ストーブの上で焼いているのは、十歳の娘のミミだ。ソバカスがいっぱいの頬がちらりと母親のすきをうかがって、焼きあがったかりっとした部分を、床にねそべる仔牛みたいに大きなセントバーナード犬に投げた。

「モアオーバーにおもちやると、太るわよ」

食卓でいずしを切り分けていた朝美が目ざとく見つけていった。



「だってお正月にはたべさせる、って約束しちゃったんだもの」

ミミはすましていた。モアオーバーはこの犬の特長の、情なさそうな目つきをいっそうすまなげにしょぼつかせて、床にあごをすりつけ、長々とねそべった。

「冬はお前、しあわせだよな。足がよごれないからミミと一緒にうちの中にはいれるものね」

直哉がいった。ミミのきょうだいみたいにいっつも一緒のこの犬は、事実、夫が遭難したあと、朝美が娘に与えた、もう一人の家族だった。

「今年もまた、いずしをつくらなかったわね」朝美が弟を見た。

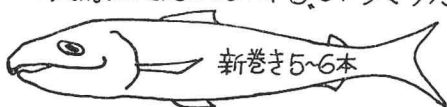
「こんなうまいのもらってる間は無理だよ」

毎年暮れに、浜春別の久保田さんが雪の峠道を四時間もかけて、道東一という評判の、手づくりのいずしを届けてくれる。以前、久保田さんの大事な馬が、急性鼓膜炎になって一刻を争うとき、通りすがりの朝美がすばやい処置で命を助けていらいのことだ。

おとそは、ミミと、お隣りの息子、原野が秋に漬けた、豆リンゴ酒とコクワ酒だった。木の実のゆたかなこの土地では、人々は、砂糖と三五度のしょうちゅうで、あらゆる果実酒を漬けこむのだった。豆リンゴは針の巣牧場の木になるサクランボ大の赤い実を、鳥がついばむ前、十一月にとって漬ける。コクワは山に生える、つる性の植物で、クマも好むオリーブ色の梅のような実だ。

隣、といっても、朝美の家よりもうひとつ奥にある針の巣牧場では、ひとり息子の原野が、古びた

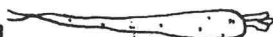
●久保田さんのいずしのつくり方



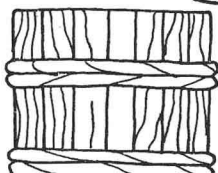
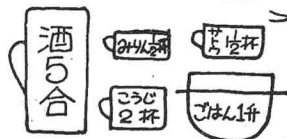
大根 15本



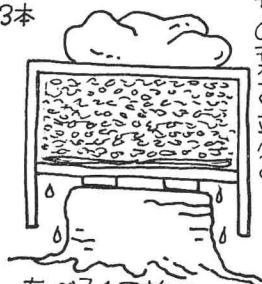
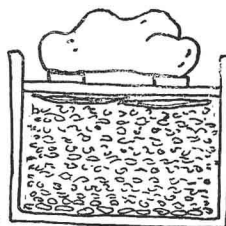
ひねしょうが 1キロ



にんじん 2~3本



白菜大株3つ



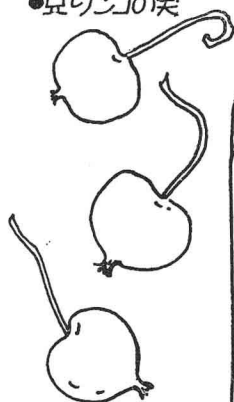
いずばん上にササの葉を並べる。

たべる1日前に
さかさにして木を切る。

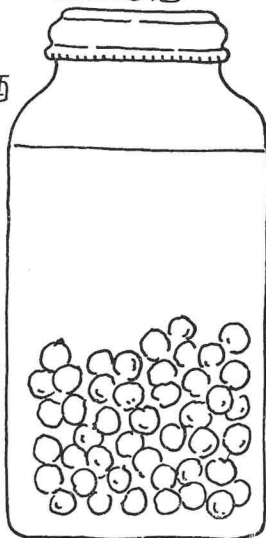
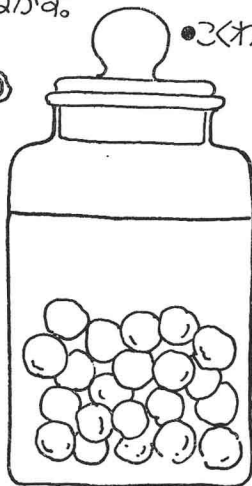
新巻きを半身に切って3~4日水にうるかし、
塩出す。1日、日に干して薄く切る。
野菜はせんぶこまかくきざす。固くたいた
ごはんに調味料をせんぶまぜてさます。
オケの中にヤサイ・ごはん・アキアジ・ごはん
ヤサイの順にくり返していれる。落し玉に
重石をし240日間ねかす。

●豆りんご酒

●豆りんごの奥



●くわ酒



大きな台所で、懸命に、オガ屑ストープにオガ屑を詰めていた。燃料の貯蔵庫は、農家ではたいてい、家のすぐ横にあり、山と積まれたオガ屑を、毎朝、ストープの上部いっぱい詰めておむのが十一歳の男の子の役目だった。ぎっしり詰めないと火持ちがわるいし、そうっと入れないと部屋中にオガ屑が舞う。気をつかう仕事だ。

牛舎で牛の世話をしてきた丈二と、牧童のジローさんが台所にはいつてきた。原野はパタン、とストープのふたを閉じた。オガ屑がぱっと舞った。

「気をおつけよ」

「うん。でも父さん、うちもそろそろ灯油のストープにしようよ。ミミのとこみたいにな。あれだとらくだしさ」

パイプを通して自動的に給油される灯油ストープがあれば、ずっとあたたかいし、原野の手間もはぶける。父さんが毎晩台所の水栓にほどこす水抜き作業も、夜じゅうストープがもえていればなくてすむ。

「お隣はお隣さ」丈二はとりあわない。「外国帰りの獣医さんのうちと同じにしくたっていいのさ。古いものには古いもののよさがあるんだ」

「そうだよ、原野」ジローさんまで父親の肩をもった。「便利なものがないもいい、とは限らないんだ。ぼくは、このオガ屑の匂いが好きさ。灯油のストープは風情がないよ」